

## マタイによる福音書26章1-30節 「十字架への準備」

### 1A 十字架の予告 1-13

#### 1B 人の企み 1-5

#### 2B 前もっての埋葬 6-13

### 2A ユダの裏切り 14-30

#### 1B 身売り 14-16

#### 2B 裏切り 17-25

### 3A 聖餐 26-30

## 本文

マタイによる福音書26章を開いてください、ついにイエス様が十字架に付けられる二日前の出来事に入ります。イエス様が、弟子たちにご自身が十字架に付けられることの準備を整えてくださっています。

### 1A 十字架の予告 1-13

#### 1B 人の企み 1-5

1 イエスはこれらのことばをすべて語り終えると、弟子たちに言われた。2 「あなたがたも知っているとおおり、二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」

イエス様による、長い、オリーブ山での話が終わりました。オリーブ山にて、世の終わりについて、ご自身が来られることについて弟子たちに教えられましたが、これらのことばを全て語り終えられて、それで「過越しの祭り」があと二日になっていると言われました。過越の祭りは、イスラエルの民がその民族の誕生の時からずっと守り続けてきたものです。エジプトに居た時に、ファラオが彼らを奴隷として労役を酷使して、主がそこから彼らを力強い腕で贖い出す時、彼らにこれこれを守り行かないなさいと命じられました。それは、子羊を用意して、それを屠り、その流された血を門柱と鴨居に塗りなさい。また種無しパン、つまり、イースト菌の入っていないパンをを食べなさい。そして苦菜を食べなさいとも言われました。そして、その子羊の肉は火で焼いて急いで食べなさいとも言われました。そして、エジプト中で全ての男の長子と雄の初子を主が打たれますが、血の塗られた家にいるイスラエル人の子は、その災いは過ぎ越して、救い出されるという祭りです。

そして律法には、過越の祭り、五旬節、仮庵の祭りには、イスラエルの地にはいないユダヤ人も、いずれかの祭りに参加しなければいけない命令があったので、特に過越の祭りにはユダヤ人がエルサレムとその周辺にごったがえしていました。そして、彼らは民族意識も高揚して、エルサレムの救いを求めていました。その救いとは、ローマからの救いでもあり、それゆえローマもかなり

神経質に騒動が起こらないように総督が、カイサリアからエルサレムに来て、また兵士たちも神殿をアントニオ要塞から監視していました。

そのような時と日に、イエス様はご自身が十字架に付けられるために引き渡されると弟子たちに告げられたのです。十字架は、以前、ピリポ・カイサリアでイエス様が弟子たちに、「自分の十字架を背負う」ことについて教えられた時に話しましたが、ローマ帝国が反逆者に対して行なった極刑です。ローマは、パックス・ローマナと言われますが、ローマの平和という意味です。世界中のローマに歯向かう勢力をことごとく武力で制圧して、世界帝国として一つにまとめました。ですので、平和と繁栄を何百年にも渡り享受しましたが、一つ、やってはいけないことは「反逆」なのです。これをする者には、容赦ない制裁を加えて、それが十字架刑だったのです。ユダヤ人で、しばしばローマに武装蜂起を呼びかける者たちがおり、彼らは十字架刑にかけられていたことでしょう。また、殺人のような重罪に対しても十字架刑が適用されたと思われれます。

ですから、過越の祭りの時に、十字架に付けられるというのは、相当なことであります。とんでもない騒動であり、「起こってはほしくない」とローマ当局も、そして実はユダヤ人指導者たちも思っていたのです。そこで次です。

3 そのころ、祭司長たちや民の長老たちはカヤパという大祭司の邸宅に集まり、4 イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。5 彼らは、「祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない」と話していた。

祭司長たちはサドカイ派の人たちで、町の長老たちはおそらくサンヘドリンにいるパリサイ派の人たちであろうと思われれます。カヤパという人が、当時大祭司でした。当時は、ローマから任命を受けていました。「邸宅」とありますが、さぞかし大きな住まいです。今もエルサレムに行くと、大きな祭司の家の遺跡が見つかります。ハリウッドのビバリーヒルズ級と言っても良いかもしれません。

そこに集まって、「イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談した。」と言っています。なぜ騙して捕らえるのか？と言えば、民衆を恐れていたからです。騒動でも起こるものなら、ローマ当局によって自分たちが排除されてしまうかもしれません。ところが、「祭りの間はやめておこう。」というのは、もちろん見事にその思惑は打ち砕かれます。ここに「十字架は、神のご計画であり、イエス様が主体」であることがはっきりと分かります。彼らの思惑とは裏腹に、まさに過越祭の真っ最中にイエス様を殺すことになるのです。そして、そこには神の深い、私たちへの愛の御心があるのです。

ところで、この企み、彼らの協議自体も、詩篇の中で預言されています。「31:13 私は多くの者がささやくうわさを聞きました。『恐怖が取り囲んでいる』と。彼らは私に対して謀議をめぐらし、私のいのちを取ろうと図りました。」彼らは謀議を巡らしましたが、すでに神ご自身がそれをもご存じて、ご自分の計画の中に取り組んでおられたのです。

## 2B 前もっての埋葬 6-13

6 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンのおられると、7 ある女の人が、非常に高価な香油の入った小さな壺を持って、みもとにやって来た。そして、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。

イエス様は、ある一家と深い付き合いがありました。ヨハネによる福音書 12 章を見ますと、この香油を注いだのはマリアであるとあります。マルタがいて、その姉妹のマリアがいました。そしてイエス様が死者の中からよみがえらせたラザロもいました。そして、ツアラアトに冒されたシモンとありますが、もう、おそらくはイエス様によって清められている人であると考えられます。でなければ、らい病人は隔離されなければいけませんから、こうやって彼の家の中に近づくことはできません。おそらく、マルタ、マリア、ラザロの家とシモンの家は近い関係にあり、そしてイエス様もどちらとも親しい関係にいたのではないかと思います。その時にマリアが一つの行動に出て、それが、ここに書いてあるように高価な香油を注いだのです。

8 弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんな無駄なことをするのか。9 この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」

弟子たちが憤慨しているとありますが、ヨハネはイスカリオテのユダが言ったとあります。これはイスカリオテのユダが初めに言い出して、弟子たちがそれに同調して言ったのではないか？と思います。他の弟子たちは、本当に貧しい人たちのことを思って言ったのだと思いますが、ユダは違います。ヨハネは、こう注釈を付けています。「12:6-7 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。」けれども、もちろんその場では全く、そのようなことは分かりませんでした。

10 イエスはこれを知って彼らに言われた。「なぜこの人を困らせるのですか。わたしに良いことをしてくれました。11 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいます。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。12 この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。13 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

イエス様は、彼女を庇われました。時に弟子たちは熱心さから、イエス様のところに近く人々を妨げてしまっていました。例えば、小さな子がイエス様のところに連れて来られる時がそうですね。そういった時に、私たちは気づきます。イエス様が、どのような心を持っているのか？自分はイエスさまのために働いていると思っても、実はイエス様はもっと広い心を持っておられるということが分かります。けれども、誰も彼をも、受け入れるということではなく、ここではむしろ大きな誤解を弟子たちがしていたことを、正されたのです。そうマリアこそが、イエス様の死を前もって知って、それで行動に表したのです。ここでもイエス様の中心は、ご自身が死に、埋葬されることであります。この

ことを弟子たちにしっかりと、知ってほしいと思われています。

## 2A ユダの裏切り 14-30

ところで、ヨハネ 12 章ではこの出来事は過越の祭りの六日前であると書かれています(1 節)。つまり、イエス様が弟子たちに予告された二日前というよりも、もっと前に起こった出来事です。けれどもマタイがなぜ、ここにこの話を入れているのか？それは、この出来事がきっかけで、ユダがイエス様を裏切る決断をしたからではないかと思われれます。

## 1B 身売り 14-16

14 そのとき、十二人の一人で、イスカリオテのユダという者が、祭司長たちのところへ行って、15 こう言った。「私に何をくれますか。この私が、彼をあなたがたに引き渡しましょう。」すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。16 そのときから、ユダはイエスを引き渡す機会を狙っていた。

イスカリオテのユダが、この女が香油を注ぐのを見て、彼が憤慨していたのに、それをイエス様が制して、彼女を庇い、さらにはご自分が死なれる話をされているところで、彼は裏切りを決めたように思われます。なぜか？これは全て想像にしか過ぎませんが、彼は個人的にイエス様を知らなかったからでしょう。ヨハネ 13 章で、イエス様は他の弟子たちとイスカリオテのユダの違いをこのようにお語りになりました。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。(10 節)」ペテロや他の弟子たちは、全身を清めていただいています。つまり、罪が赦されて、たとえその後、罪を犯したとしてもその都度に、清められればよいのです。けれども、イスカリオテのユダはそもそも、清められていない。つまり、イエス様との関係を初めから持っていなかったのです。

ユダは、「信者のようにふるまっても、実は信者ではなかった」典型的な人です。弟子としてのあらゆることは、することができました。イエス様から権威も与えられて、悪霊も追い出すことができたことでしょう。けれども、何が彼を遠ざけたのか？女の献身的な香油を注いだところに表れている、イエス様の心です。彼女の献身は本物でした。本当にイエスに愛されていることを知っていたので、イエス様に全てのものを捧げることができました。そしてそこには、イエス様に近い人々がいます。マルタ、ラザロ、そしてらい病シモンです。そのような、イエス様に愛されていることを知っていても、イエス様に近い人たちにはあって自分には無かったものがあり、それがこの個人的に、人格的に知っている関係、イエス様に愛されている関係であったのでしょう。けれども、そこでイスカリオテのユダは、彼らにあって自分にはないものを見たのかもしれませんが。また、イエス様が死なれるということにも失望していたのかもしれませんが。さらに、もちろん自分がお金を横領していたこともできなくなったということもあるでしょう。

イスカリオテのユダがいなければ、祭司長たちはイエス様をどのように秘かに殺すか分からなかったのですが、ちょうどやってきたのでした。内通者がいれば、捕えるのは楽です。彼に、「銀貨

三十枚」を支払っています。これはゼカリヤ書の預言の成就であります。ゼカリヤが羊飼いを演じていて、銀三十枚を受け取った後に、それを主の宮の陶器師に投げ与えたことが書かれています。けれどもそもそも、どうして銀三十枚なのか？「出 21:32 もしその牛が男奴隷あるいは女奴隷を突いたなら、牛の持ち主はその奴隷の主人に銀貨三十シケルを支払い、その牛は石で打ち殺されなければならない。」奴隷が殺された時の賠償金の額が三十シケルなのです。つまり、イエスのために支払う値は、奴隷のそれなのだということです。祭司長たちがこの額にしているのは、もちろん彼らは律法を知っていますから、イエスを奴隷のようにあしらっている訳です。

そしてユダはこれを受け取りました。つまり、ユダにとっては、イエス様は、奴隷の対価のような存在です。しかしマリアにとっては、300 デナリ、つまり 300 日分の労賃に値するような金額をイエス様に使いました。

## 2B 裏切り 17-25

17 さて、種なしパンの祭りの最初の日に、弟子たちがイエスのところに来て言った。「過越の食事をなさるのに、どこに用意をしましょうか。」18 イエスは言われた。「都に入り、これこれの人のところに行って言いなさい。『わたしの時が近づいた。あなたのところで弟子たちと一緒に過越を祝いたい、と先生が言っております。』」19 弟子たちはイエスが命じられたとおりにして、過越の用意をした。

「種なしパンの祭りの最初の日」とあります。出エジプト記 12 章に過越の祭りの日が書かれていますが、13 章に種なしのパンの祝いが書かれています。これは七日間、行われます。過越の祭りが、アビブの月の 14 日ですが、レビ人たちはその時に子羊を屠っていきます。午後 3-6 時頃に行います。そして日没になってから、次の日 15 日です。種無しパンの祝いはその日から七日間行われます。14 日のうちに、人々はその屠られた子羊と共に、他に種無しパン、また苦菜などを用意しておきます。そして大事なのは、食事を取る場所です。エルサレムはごった返しており、その周辺に広大なテント村ができたそうです。その中で食事を取るのですが、弟子たちがどこで食事を用意しましょうか？と尋ねています。

イエス様は場所を指定されました。イエス様の言葉から、食事をする家の主は、弟子の一人であった可能性があります。まず、先生、ラビと言わせています。それから、「わたしの時が近づいた」と言わせています。これは、イエス様が死なれる時です。イエス様は何度となく、わたしの時という言葉を使い回しを使っておられました。ですから、その意味する所が完全に分からなくても、何か重要な時であることを察することはできたでしょう。

20 夕方になって、イエスは十二人と一緒に食卓に着かれた。

過越の食事は日没になってから、始まります。食事をセダーと呼び、また式次第もありました、ハ

ガダーと呼びます。順番にしたがって、儀式を取り行なっていくのです。これは、今にまで続き、ユダヤ人の家庭に行けば、執り行っているものです。有名な、イエス様の最後の晩餐の絵画がありますが、あれはレオナルド・ダビンチが描いたもので西洋化されています。その時は、コノ字にしたお膳みたいになっていて、その周りを横たわって座っていました。横たわっているのは、奴隷状態から自由にされていることを示します。

初めに蠟燭を点火し祈りを捧げます。父親が子供を祝福し、そして第一の杯が回されます。食事の中では、合計、四回、杯を交わします。第一の杯は感謝の杯と呼ばれます。第二は裁き、第三は贖い、そして第四は賛美の杯です。第一の杯の後に、水で指を洗いますが、この時にヨハネ福音書 13 章の、イエス様の足洗いがあったのでしょうか。そして第二の杯、裁きの杯を飲みます。これは、主がエジプトに裁きを行われたことを記念するものです。それから、苦菜を塩水に浸して食べるのですが、これはエジプトの奴隷生活で汗水を流した辛さを思い出すものです。

21 皆が食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」22 弟子たちはたいへん悲しんで、一人ひとりイエスに「主よ、まさか私ではないでしょう」と言い始めた。23 イエスは答えられた。「わたしと一緒に手を鉢に浸した者がわたしを裏切ります。」24 人の子は、自分について書かれているとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。」25 すると、イエスを裏切ろうとしていたユダが「先生、まさか私ではないでしょう」と言った。イエスは彼に「いや、そうだ」と言われた。

この第二の杯を飲み交わした後で、苦菜を塩水につけてエジプトでの苦しみを思い出す儀式の時に、イエス様は、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ります。」と宣言されました。弟子たちはみな動揺していますが、イエス様とユダとの会話は近くで話されたので、他の弟子たちは気づいていなかったと思われます。同じ鉢に苦菜を浸すのですが、2-3 人で一つの鉢を使用していたので、ユダとイエス様は近くにいたと思われるのです。

弟子たちが動揺していますが、これは自分がもしかしたら裏切ってしまうのではないかと不安の表れであるとも言えます。しかし、彼らは後に躓きはするものの、ペテロを始め、皆が立ち返ります。この違いは何なのでしょう？繰り返しますが、イエス様から愛されているということを受け入れているか、拒んでいるかの違いでありましょう。心からイエス様を受け入れているかそうでないか、ということです。ですから、多くの人がまさか自分ではと思うのですが、それは実は自然なのです。自分だけを見つめれば、確かにこの方を裏切ってしまうのではないかと思いますが、けれども、自分の意志の力ではなく、神の選びの力であることでしょう。どこに、イエス様に従う力が出て来るのか？それは、イエス様の愛の呼びかけに応答しているかどうかであります。自分の意志以前に、神ご自身の意志、その召しがあるのです。

今、話しましたようにユダは、イエス様から「いや、そうだ」と言われて、彼が裏切ることを言われました。他の者は気づいていないので、そうやってイエス様は最後の最後まで、ユダに悔い改めの機会を与えています。イエス様は、決して人をあきらめたりされない方です。滅びの子であったとしても、それでも救いの御手を差し伸べてくださるのです。

24 節のイエス様の言葉は、一つにここに神の主権があったことを認めておられます。ご自分についてそうなるのだと言われていますが、ダビデが側近のアフィツェルに裏切られたことを歌っている中で、キリストについての預言を行いました。「詩 41:9 私が信頼した親しい友が私のパンを食べている者までが私に向かってかかとを上げます。」けれども、それによって彼が行ったことに責任がないということではありません。生まれてこなかった方が良かったというのは、とても深い嘆きを表しています。ヨブが、自分の苦しみの中で生まれてきた日を呪いました。神を拒んで、自らを滅びに定められるのであれば、生まれてこなかった方がよかったという悲惨を意味しています。

そしてこの後で、食事は「アフィコーメン」と呼ばれるパンを食べます。三つの部分に分かれた布袋に、それぞれ三枚の種無しパンを入れます。そして真ん中のパンを引き出し、それを二つに裂きます。その半分を麻布にくるんで隠します。そして食事の後に、それを持ち出して食べるのですが、そもそもなんでそんなことをするのですか？と尋ねても、ユダヤ人の人は答えることができません。イエス様を信じているユダヤ人は答えることができます。三つのパンは、父、子、聖霊を表しています。その真ん中、御子のパンだけが裂かれます。そして、麻布にくるむのは、イエス様が裂かれて死なれてから、墓に葬られる姿です。そして、そのパン自体にも、キリストの姿が出ています。いつも、皆さんが聖餐式で食べているパンです。あそこには、二つの特徴があって、一つは筋ができています。もう一つは穴があることです。イエス様の肉体を示しています。むちで打たれて体に筋ができています。そして釘が打たれて、穴ができています。

そして、ハロセットと呼ばれるものを食べます。これは、りんご、ナッツ、干しぶどうなどを蜂蜜とグレープジュースで混ぜた甘い物です。これを、まず苦菜、といっても、赤いわさびを擦ったものを食べてからすぐに食べるのです。ものすごい辛いですが、ハロセットを食べるとその辛さがすぐになくなります。イスラエル人が煉瓦を積み上げながら苦しんでいたけれども、その苦しみは神の救いによって甘さに変わるというものです。この時に、ヨハネ 13 章によるとイスカリオテのユダが、去っていきます。そしてこの後に、子羊を食べます。このメインコースを食べます。その後の話が、次、26 節です。

### **3A 聖餐 26-30**

26 また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

これは、先ほど隠したアフィコーメンを取り出して食べているのです。イエス様の体そのものを示し

ているパンを食べています。イエス様はここで、出エジプトの意味は一気に変えられました。過越の祭りは、すなわちご自身を示していて、ご自身の死によってイスラエルが贖われるとされたのです。エジプトにおける奴隷状態は、罪の奴隷状態であることを表し、エジプトから解放されることは、罪から解放を示し、そして災いが過ぎ越すのは、イエス様が流された血によって神の怒りが過ぎ越すことを示し、そしてエジプトから出るのはこの世から救い出されることを意味します。私たちは、このパンを食べる時に、イエス様が裂かれた肉を覚えて食べているのです。「イザ 53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」

27 また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。28 これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。」

これが先に話した、第三の杯、贖いの杯です。イエス様はその贖いを、ご自分の流される血によって成し遂げられることを意味されました。そして、これを「わたしの契約の血」と言われます。その契約とは何を持ってなのか？と言いますと、エレミヤがかつて預言した新しい契約です。「エレ 31:31-34 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

かつての出エジプト、その後で結ばれた契約は石の板に書かれているものでした。そして彼らが従順であれば、祝福を受けるといふ、彼らの忠実さに拠るものでした。けれども、それでは失敗しました。そこで神は、新しい契約を立てますが、それは石ではなく、心に律法を書き記してくださるというものです。つまり、御霊によって心を変えてくださって、それによって神の命令に従うことができるようにくださったのです。私たちは、自分で神の命令を守ることはできません。けれども、神が聖霊によって、私たちの心を一新してくださったのです。それゆえ、神から聞く時に、それに従順になることができます。

そして新しい契約のもう一つの特徴は、「罪が赦される」ことです。もはや罪を思い起こさないと言われていました。その契約のために、イエス様は血を流してくださいます。それでイエス様は、「罪の赦しのために流される、わたしの契約の血」と言われます。



この時点で、イスカリオテのユダはいません。言わばイエス様は今、かつてイスラエル人が出エジプトの時に初めての過越の祭をしたように、第二の新しい過越の祭りをお祝いされていると言ってもよいでしょう。この契約に入っているものだけが、イエス様の裂かれた肉にあずかり、流された血にあずかり、それによって罪が完全に赦され、また癒しを受けるのだということ。そして、罪からの救い、悪の世からの救いにあずかるのだということです。弟子たちは、これからとてつもない試練を通るのですが、それでも彼らはサタンのふるいにかけられても、信仰を捨てずに済みます。みなさんも、同じです。自分が神を選んだのではなく、神が選んでくださり、イエス様の血によって罪から解放してくださったのです。

29 わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国であなたがたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。」

ここでイエス様が語られている御国は、ご自身が再臨されて立てられる神の国のことです。そこでは宴会があります。「イザ 25:6 万軍の【主】は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。」イエス様は、それまでの間、いわばナジル人になられます。ナジル人は、誓約を立てた一定期間、一切、ぶどうから取ったものを口にすることはありません。私たちは今、主が来られるまで、主の死を告げ知らせる誓いの中に生きていますが、主が来られて御国で宴会にあずかる時まで、しっかりとこのことを守るのです。

30 そして、彼らは賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた。

贖いの杯を飲んだ後に、賛美をします。それは、ハレル詩篇とも呼ばれる、詩篇 113-118 篇までの歌です。そこにはキリストについての預言が数多く出てきます。そして、第四の杯、賛美の杯、あるいは回復の杯とも呼びますが、それを飲みます。イエス様が賛美をされました。そこには、ご自身が要石として捨てられることも歌っています。そして、オリーブ山に行かれます。ゲッセマネの園です。

イエス様が十字架の備えをしてくださいました。私たちも弟子たちと同じように、いつもイエス様の愛の中にあります。そこには試練があります、躓きがあります。けれども、その中に裂かれた肉と、流された血をいつも覚える聖餐があります。主の死を、御国が来る時まで告げ知らせるのです。